馬興国さん追悼

大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

馬興国さんに初めてお会いしたのは、二〇年前（一九九七年）のこと。それ以前から民俗学の優れた研究者としてお名前は存じていたが、宮田登先生のもとで一九九七年春から一年間の予定で常民研に来ておられると知って連絡を取り、遅きに失したと悔いつつ、翌年一月に人文研の日中関係史グループにお呼びして、「中国東北の日本文学研究」と題して報告をしていただいた。中国における日本研究全般の状況にも通じておられる様子なので、上記のタイトルでの報告をお願いしたのだが、その際用意されたレジメは、まもなく私自身が中国研究所で「中国は日本をどう見てきたか」と題して報告する機会があった際に、とても役に立った。

そのふた月後帰国するに当たって、馬さんからお世話になった方への感謝の会を開くのでという案内が届き、その頃馬さんが宿泊していた鶴見の横浜国際学生会館に出かけると、そこのホールには宮田先生を始め五〇人ほどの人が参加しておられ、ダ・カーポのお二人の歌を交えた、肩の凝らない暖かい雰囲気のパーティーとなり、馬さんの日本滞在中の交流の広がりを感じた次第。

時が経って、数年前に特別招聘教授として神奈川大学に赴任された馬さんに再会することになった。と言って

も、中国の大学との交流に力を発揮することが期待されての赴任とあって、しばらくは学内で偶然に見かけてあいさつする程度だったが、お目にかかる機会がにわかに増えたのは二〇一一年春、その年が中国で起こった辛亥革命一〇〇年に当っていることから、それを記念して大きなシンポジウムを神奈川大学で開きたいという当時の中島三千男学長の強い要請があって、それまで考えてもいなかった準備を始めた時のことであった。

中国側からは中国史学会と清華大学から二〇名余の研究者が参加し、その数に見合う数の日本側の研究者を各地から選んでのシンポジウムを成功裏に実施するためには、馬さんの協力を欠かすわけにはいかないということで、神奈川大学としては馬さんと孫安石さん達中国語学科の同僚、国際交流センターの皆さんの協力を得て準備を進め、一一月五、六の両日には程永華中国大使臨席のもとで開幕式を行い、二日で延べ二〇〇〇人の参加を得て、シンポジウム「辛亥革命とアジア」を実施することが出来た。神奈川大学を挙げての協力があって成功したのはもちろんながら、気づかないところで馬さんの支えがあったおかげである。

三年前に私が定年を迎えてお会いする機会はずっと少なくなったが、二年前だったか、中島三千男さん、森武麿さん、大里の三人の退職をお祝いしこれまでのお世話に感謝するとして、新宿の羊しゃぶしゃぶの店でお知り合いの松尾康二さんと一緒になってごちそうしてくださったことがあり、二〇年前にもごちそうになったことを思い出した。

もう一度、辛亥一〇〇年のように有意義で盛大な集まりを一緒に開きたいものだと語っていたという馬さん、本当にお世話になりました。